

明治時代の水道共用栓

これらの給水栓は、1891 年に流行したコレラの流行を防ぐために導入された。コレラは 1858 年に長崎から再入し、その後数十年間にわたって、何度も流行した。

コレラは飲料水を媒介とする病気であり、当時は公共の水が容易に汚染されていたため、伝染病が流行し、コミュニティ全体が急速に破壊されていた。長崎居留地のビジネスリーダーの一人であるフレデリック・リンガー(1838~1907 年)は、コレラやほかの水を媒介とする病気の蔓延を防ぐのに役立つ公共水道を建設するよう長崎政府に働きかけた。1886 年、リンガーらはイギリス人技師、ジョン・W・ハート(1832~1900 年)を長崎に招いた。ハートは上海の上水道を設計しており、地元政府に同様の水道設備を提案した。5 年後、水道が完成し、長崎は日本で 3 番目の水道を備えた都市となった。

上水道の設置には莫大な費用がかかり、水道が民家に拡大されるまでには何十年もかかった。それまで、長崎の人々はこのような公共の水道を使っていた。市の職員が 1 日に 2 回市内を歩き回って、午前中にそれぞれの蛇口を開け、夕方には閉めていた。グラバー園の蛇口には、押すと水が放出されるボタンが設置されている。

採用番号 NO :	023-016
-----------	---------